

「お前のデータ、全部
俺が持ってる」天才ハ
ッカーにカントの処女
を奪われ四回中出しさ
れて root 権限ごと
雌堕ちする話

「——っ」

背筋に電流が走って、瀬尾透は息を呑んだ。サーバーラックのLEDが青く点滅する薄暗い部屋で、ゲーミングチェアに押し倒された姿勢のまま、下半身だけが剥き出しにされている。

スーツのベルトは外され、スラックスは片足だけ引き抜かれて床に落ちていた。シャツの裾がめくれ上がり、冷却された空気が剥き出しの太腿を撫でる。

「——1年間、ずっと見てました」

フードの下から覗く目。隈の深い、青白い顔。モニター6枚の光を背に受けた男——久世零が、瀬尾の太腿の間に長い指を差し入れていた。

「な、にを——」

「検索履歴。2月3日、午前2時14分。『カント 男 犯される』。2月5日、午前1時47分。『中出し 無理やり BL』——」

「やめっ——!!」

叫んだ瞬間、正面のモニターが一斉に切り替わった。

ブラウザの履歴がスクロールしていく。検索ワードが次々と画面に並ぶ。『カントボーイ 感じ方』『男なのに濡れる』『犯されたい 男』——何百という文字列が、青い光の中を流れ落ちていく。

「消してほしいでしょう？」

久世の指先が、下着の上からカントの割れ目をなぞった。

「ッ……♡」

布越しても分かる。もう濡れている。ここに来る前から。脅迫メールの「検索履歴も興味深く拝見しました」の一文を読んだときから、怖くて、恥ずかしくて——それなのに、下腹の奥がじわりと疼いていた。

(なんで……っ♡ 脅されてるのに、なんで身体がこんな……)

「体温36.2。心拍118。……脅迫されて来たにしては、カントがずいぶん正直ですね」

久世がモニターのひとつを指差す。画面の隅にバイタルデータらしい数字が並んでいて、瀬尾は自分のスマホが乗っ取られていることを今さらのように思い知った。

「お前のスマホのヘルスケアアプリ、1年前からデータ貰ってました。——脱いでください」

「っ、警察に——」

久世がキーボードを片手で叩く。瀬尾のスマホが勝手にロック解除され、画面に110の発信画面が表示された。

「どうぞ。ただ、発信した瞬間にこの画面がお前の母親のLINEに転送されますけど」

指が止まった。

母親には絶対に知られたくない。カントボーイであること。毎晩のように男に犯される妄想を検索していること。自分の身体に、女性器がついていること。

(……どうすればいいんだ)

膝が、かくかくと震えた。逃げ場はない。入口のドアは電子ロック——久世のスマホでしか開かない。窓もない。サーバーのファン音だけが、低く唸り続けている。

「簡単ですよ」

久世が椅子から立ち上がった。思ったより背が高い。パーカーの下肩幅が、見た目に反して広い。

「俺の言うことを聞いてくれたら、USBも返すし、データも消す。——今夜だけでいい」

長い指がネクタイを掴んだ。ぐい、と引き寄せられる。

「っ……」

「1年間、画面越しに見てた。お前が夜中にベッドでうつ伏せになって、枕に顔を押し付けて腰を震わせてるの。——自分じゃ触れないんでしょう。怖くて」

耳元で囁かれる声は、ぼそぼそと平坦なのに、息だけが妙に熱い。

「俺が触ってあげますよ」

下着を引き下ろされた。

冷気が直接カントに触れて、全身が粟立つ。18℃に設定されたサーバールームの冷たい空気が、濡れた粘膜を冷やした。

「ひっ……♡」

「……綺麗だ」

久世の声が、初めて揺れた。

ぼそぼそとした口調の奥にある、隠しきれない熱。モニターの青い光に照らされた瀬尾のカントを見下ろすその目が、1年間封じ込めていた何かを決壊させかけている。

「1年間、画面でしか見られなかった。——触っていいですか、なんて聞くつもりはないですけど」

長い指が、カントの裂け目を割り開いた。

「ふあっ……♡♡」

冷たい。プログラマーの骨張った指先が、ぞくりとするほど冷たい。その冷たさが濡れた粘膜に触れた瞬間、温度差で快感が弾けた。

「あっ、あ……♡♡ つめた——♡」

「この部屋、常時18℃なんで。体温との差で、普段より敏感になってるはずですよ」

指先がクリトリスの包皮をずらした。ぶくりと充血した突起が、冷気に晒される。

「ひう♡♡ やっ、そこ——♡♡」

「ここ、普段触ってないでしょう。1年間のカメラ映像で確認済みです。お前、ベッドでうつ伏せになって枕に股間押し付けるだけで、自分の指で触ったことない」

(なんて、全部知ってっ……♡♡)

久世の指がクリトリスをくるり、と撫でる。たったそれだけで腰が跳ねた。

「あっ♡♡」

「いい反応。——データ通りだ」

ウェブカメラの角度が変わる。正面のモニターに、ゲーミングチェアに仰け反る瀬尾の姿がリアルタイムで映し出された。太腿を開かれ、カントが露わになったまま、久世の指に弄られている自分。

「自分の顔、見ててください」

「やだっ♡♡ 映さないで……♡」

「データ取るんで」

モニターの隅に、赤い●RECの文字。

録画されている。今この瞬間、カントを指で弄られて声を漏らしている姿が、全部記録されている。

(やだ……♡♡ でも、目が離せない……♡♡ 画面の中の自分が、知らない顔してるっ……♡♡)

「やめっ……♡♡ お願い、それだけは——」

「消してほしかったら——」

指が一本、カントの中に沈んだ。

ぬぷ♡

「あっ♡♡♡」

(入っ……♡♡ 指が、中に……♡♡)

きつい。何も入ったことのない穴が、指一本で悲鳴を上げている。カントの壁がびくびくと収縮して、侵入者を締め出そうとする——のに、奥から蜜がとろりと溢れて、指の侵入を助けてしまう。

「狭い。本当に処女だ」

久世の声が低く震えた。ぼそぼそした口調が明確に崩れている。

「……お前のここ、1年間ずっと画面越しに見てたんですよ。触りたくて、おかしくなりそうだった」

指がゆっくり出し入れされる。

にちゅ……♡ ぬちゅ……♡

サーバールームの静かな空間に、卑猥な水音が響く。ファンの唸りにすら掻き消されない、濡れた粘膜が指を呑み込む音。

「やぁ……♡♡ 音、聞こえ——♡」

「聞こえますよ。全部。——もう一本入れます」

「っ♡♡ む、むり——♡♡」

無理じゃなかった。二本目が入った途端、カントの壁がぐにやりと柔らかく開いた。さっきまでの抵抗が嘘みたいに、内壁が指に絡みつく。

ぐちゅ♡　ぐちゅ♡

「ひう……♡♡　あっ、あぁっ……♡♡♡」

甘い声が漏れた。自分の口から。慌てて手で口を押さえる。

モニターに映る自分の顔——紅潮して、目が潤んで、必死に声を嚙み殺している姿が丸見えだった。

久世が手を掴んで引き剥がす。

「声、隠さないで。マイクも拾ってるんで」

「う、あっ♡♡　やだ……聞かないで……♡」

（男なのに……♡♡　こんな場所から、こんな声出して……♡♡）

指が二本、カントの中をかき回す。親指がクリトリスに当たるたびに、腰が勝手に跳ねた。

「あ♡　あっ♡　んっ……♡♡　そこ、そこだめ……♡♡」

「クリトリスへの反応が一番大きい。——データ通りだ」

三本目がねじ込まれた。

ぐちゅん♡♡

「おおっ♡♡♡　むり、三本は——♡♡」

「カントの拡張限界、まだ先ですよ」

「データの話しないでっ♡♡♡」

三本の指がカントの中を蹂躪する。ぐりぐりと壁を押し広げ、奥を掻き回す。蜜が溢れて久世の手首を伝い、ゲーミングチェアの座面に滴り落ちた。

「ひっ♡♡ ふあ♡♡ おあ……♡♡♡ 中、かき回されてっ……♡♡」

（だめ……♡♡ こんな、おかしい……♡♡ 男なのに、カントで感じて、こんなに濡らして……♡♡）

親指がクリトリスの根元をぐり、と押し潰した。

「——おおあっ♡♡♡♡ そこっ♡♡ そこだめっ、イっ——イっちゃ♡♡♡」

「イって。全部、記録してるから」

ばしゃっ、と音がした。カントが指を締め上げ、内壁がぐるぐると痙攣し、蜜が飛沫を上げて久世の手を濡らす。

初めてのアクメ。男に触られて、カントで迎えた、人生で初めての絶頂。

「はあ♡♡ はあ♡♡ は……♡♡♡」

全身が小刻みに震えている。目の焦点が合わない。モニターに映る自分の顔は、快楽に蕩けきっていた。

「……第一回のデータ、良好ですね」

久世が指を抜く。ぬちゅ、と粘ついた音。三本の指はカントの蜜でてらてらと光っていた。

「——これから本番です」

パーカーのジッパーが降りる。その下は裸。引きこもりの青白い身体、なのに腹筋の筋がくっきり浮いている。

スウェットを下ろすと、完全に勃起した性器が露わになった。長い。太い。先端から先走りが糸を引いて、モニターの光に照らされてぬらりと光る。

(……大きい……♡♡)

見た瞬間、カントがきゅうっと締まった。恐怖なのか期待なのか、自分でも分からない。

「1年間、お前のカメラ映像で抜いてた。今日から——実物で抜く」

瀬尾の脚を持ち上げ、ゲーミングチェアのアームレストにそれぞれ引っ掛ける。カントが完全に開かれた体勢。6枚のモニター全てに、濡れそぼったカントが映し出されている。

「やだっ♡♡ やめ——入らない、こんなの——♡♡」

「入りますよ」

先端がカントの入り口に押し当てられた。蜜でぬるぬるの穴は、それでも処女の本能で閉じようとする。硬い先端がくぷ、と割れ目に食い込んで——

ずぶ♡

「いっ……♡♡♡」

先端が割り入った。

痛い。のに、奥から蜜がじゅわっと溢れた。拒絶する頭と、受け入れようとする身体。

久世は構わず腰を進める。

ずぶ♡ ずぶ♡ ずぶ♡

一定の速度で。機械みたいに正確な動きで。キーボードを叩くときの、あの冷酷なリズムで。

「ひう……♡♡ あ、お……っ♡♡ おく、奥まで——♡♡♡」

根元まで入った。

カントの最奥に硬い先端がこつん、と突き当たる。瀬尾の身体が大きく跳ねた。お腹の奥の、自分でも触ったことのない場所に、男のものが届いている。

（おなかの奥が……熱い……♡♡ こんな場所があるなんて、知らなかった……♡♡）

「全部入りました。——画面、見てください」

モニターに映る結合部。カントが久世の性器を根元まで呑み込んでいる。結合部から蜜が溢れて、透明な糸を引いている。高画質の映像が、自分の身体がどうなっているかを残酷なまでに映し出していた。

「やだぁ……♡♡♡ 見たくない……♡♡」

（男なのに……♡♡ カントで、おちんぽ咥え込んで……♡♡ こんな姿、見たくない……♡♡♡）

「見てください。じゃないと録画、消しませんので」

目を開けさせられる。現実と映像が同時に。自分のカントが男の性器に貫かれている——その事実が、視覚からもう一度突きつけられた。

久世が腰を引き——

一気に突き上げた。

ずちゅっ♡♡

「おおっ♡♡♡♡　だめっ♡♡　いきなり動かさないでっ♡♡♡」

サーバーのファン音に、湿った肉がぶつかる音が重なった。久世の腰の動きは最初から容赦がない。引いて、突いて、引いて、突いて——正確で、冷酷で、一定のテンポ。

ぐちゅ♡　ずちゅ♡　ぬぷ♡　ぐちゅ♡

「声、いいですね。録音のレベルメーター、振り切れてる」

「録るなあ……♡♡♡　あっ♡　あっ♡♡　おくっ、おくう♡♡♡♡」

カントの奥を突かれるたびに、蜜が泡立つ。ゲーミングチェアの合皮の座面はびしょ濡れで、腰が動くたびにぐちゅぐちゅと水音が二重に響いた。

「処女のカント、気持ちいい」

久世の口調が崩れ始めた。ぼそぼそした喋り方の端が荒れて、息が混じる。

「お前のカント——最高だ。データ通り——いや、データ以上」

「おっ♡♡ おっ♡♡♡ そんなこと、言わないでっ……♡♡」

（嬉しいって、感じてる……♡♡ この身体が……♡♡ 男に「気持ちいい」って言われて、カントが喜んでる……♡♡♡)

認めたくないのに、内壁がぎゅうっと久世のものを締め上げた。

「締めた。——今、俺の言葉で締めたでしょう」

「ちがっ……♡♡♡」

「データは嘘つかないですよ」

腰の動きが加速する。チェアごとがたがたと揺れ、キャスターが床を滑る。

「おおおっ♡♡♡♡ やだっ♡♡ 壊れ——いくっ♡♡ イっちやうイっちやう♡♡♡♡」

「イって。——全部、記録してるから」

カントが痙攣する。全身が弓なりに反って、内壁が久世の性器を万力みたいに絞り上げた。

同時に——

どくっ♡ どくっ♡ どくっ♡